

上演 9

2023年7月31日4校目

四国 ブロック (徳島県)

徳島県立城東高等学校

「21人いる！」

第47回全国高等学校総合文化祭演劇部門

第69回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

鹿児島県立加治木高等学校 (鹿児島県)

恩田 彩衣

歴史としてしか受け取ることのできない戦争への当事者意識をもたらし、強烈な恐怖を感じさせる劇だった。

21人の演劇部員が部室に集まるが、どこか様子がおかしい。日数の経過とともにコミカルな彼らの青春風景の外部を取り巻く社会情勢が露わになっていく。男子部員は「ボランティア」として強制的に連れていかれ、残された他の部員たちも攻撃によってバラバラになる。すべてが終わり、部室に戻ることができた数名の部員たちは、救援物資として届いたカラフルなTシャツを21人と重ね合わせ、みんなが揃う部室を夢見る。

物語の状況は、現実で起こっている複数の出来事を連想させた。また、高校の演劇部員という身近な立場だったことから共感がしやすかった。それゆえに人が簡単に死んでしまう状況に現実味を感じられ、これまでの自身のそういった出来事へ対する理解や実感の不足に危機感や悔しさ、恐怖や無力感を感じた。

一方で、どんなに辛い状況でも居場所を保とうと努力したり、演劇を作りたいと願ったりする登場人物の強さも伝わった。非常サイレンや爆撃音をクラシック音楽で表現している点からは、災害や戦争などと芸術との繋がり、その状況下での演劇の大切さを読み取った。ジャーナリズムとしての演劇、人々の理想を描く演劇、という二つの演劇の側面を私たちはどう生かしていくべきかが問われているように感じられる。

終盤のTシャツを並べるシーンでは、失った仲間たちの存在が際立ち、寂しくなった。私たちの周りの人々が生きていることも当たり前ではない。現在の平和な世の中は、突然抗えないものによって壊されてしまうかもしれない。劇中では「しょうがない」というセリフが散見されるが、それだけの言葉で命を失うことを許してしまう自分たちの甘さに気づかされ、心無い言葉が飛び交う中で、忘れてしまっていた命の重みを再認識させられた。

